

社会学のディシプリン再生と デュルケーム



目次

● 研究代表者の挨拶	1
● 研究内容の概要	2
● 各班の研究内容と今年度の研究計画	4
● 連載 玩味玩読デュルケームのことば 第1回	9
● トピックス	11
● お知らせ	11
● 成果報告	12

News Letter
vol.1
2015.7

研究代表者の挨拶

研究代表者 中島道男

「その創立者を忘れてしまった科学は、もう駄目である」(J. B. Allcock)。

困ったことに、ホワイトヘッドは、これとは逆の主張をしている。——「その創立者を忘れかねている科学は、もう駄目である」。人口に膾炙しているのも、こちらの方である。ロバート・マートンも『社会理論と社会構造』「序論」のエピグラフとして、ホワイトヘッドのこの言葉を掲げている。創立者のことなどは忘れてしまった方がよいのだろうか。

ホワイトヘッドが念頭においているのは、自然科学についてであろう。たしかに、自然科学においては、ニュートンにまでさかのぼって研究する必要はないかもしれない。「科学ではもはやニュートンの『プリンキピア』に立ち返って詮索しなくともよい。それが進歩というものである」(中山茂『歴史としての学問』)。通常科学化して

しまえば、累積や進歩が目指されるのである。

では、社会科学についてはどうだろうか。この点についてわれわれのスタンスを示したのが、冒頭の言葉である。社会科学は自然科学とは違うのだ。社会学において古典が重要であるのも、このことと関わっている。社会学は、ある意味、通常科学化していないのである。標準的な教科書がないのも、そのことの現われである。

古典に意義が認められているところにおいては、創立者を忘れてしまうことなど、あってはならない。古典からは、読むたびにさまざまな示唆が得られるし、また得るべきである。もちろん、自然科学においても古典は無視されていいわけではない。——「通常科学の奥行きの深い自然科学の分野においてさえも、学問の危機に際しては路線のつけかえをめぐって、古典が意味をもつことがある」(中山茂)。

では、古典をいかに読むのか——。それは、わ

れわれの科研課題を遂行していくなかで多様な形で示されるであろう。とはいへ、ひとつだけはっきりしているのは、われわれは、古典を（「情報として読む」のではなく）「古典として読む」ということだ。それは、「新奇な情報は得られなくて、古くから知っていたはずのことがにわかに新鮮な風景として身を囲み、せまってくるような」読み方である（内田義彦『読書と社会科学』）。われわれの読みを位置づけるにあたって、福沢惣れを自認している丸山眞男が、「福沢惣れによって福沢の真実にはとうてい到達できない」という批判にたいして、「一理も二理もある」ことは認めつつ述べていることを引いておくのもよいかもしれない。——「惚れた恋人には『あばたもえくぼ』に映る危険は確かにある。しかし、とことんまで惚れてはじめてみえてくる恋人の真実一つまり、電車の反対側の席に坐っている美人をみているだけの目には、況んやはじめから超越的な批判のまなざしで判断する者には、ついに到達できない真実——というものもあるのではなかろ

うか。〔中略〕そうして、とことんまで惚れてはじめて見えてきた対象の真実は、一時ほどの熱がたとえ覚めたあとでも、持続的な刻印として当人の頭脳と胸奥に残るものである」（丸山眞男『「文明論之概略」を読む』上）。

われわれが対象とするのはエミール・デュルケーム（1858～1917）である。彼は、社会学の founding fathers のひとりであり、社会学史上の「巨人」である。フランスの大学ではじめて社会学講座を創設した人物でもある。社会学をディシプリンとしてまとめあげ、他の社会諸科学から区別するものは何なのかという問題を、デュルケームほど考えた人はいないだろう。このデュルケームを事例として、ディシプリンとしての社会学の再生を考えようというのがわれわれの課題である。とはいへ、デュルケームが活躍したのは 100 年前である。もうすぐ没後 100 年にもなる。この 100 年の開きは無視できない。いかに読むか——。まさに、われわれの読みが試されているといえる。

研究内容の概要

●研究課題名

社会学のディシプリン再生はいかにして可能か
——デュルケーム社会学を事例として

●研究代表者

中島道男（奈良女子大学）

●研究分担者

15 名（平成 27 年度・詳細は pp.4-7 を参照）

●研究種目と期間

基盤研究 B（15H03409）

平成 27（2015）年度～平成 30（2018）年度

●研究概要

社会学は、社会の変化に応じて学問領域を拡大・細分化することで発展してきたが、理論・方法が多様化し、研究対象が拡散するなかで、ディシプリンの固有性が揺らぎ、発信力や教育力の低下、学徒減少などの危機が生じている。この危機に根本から取り組むためには、社会学のディシプリンがどのように構築されてきたかを解明する「自己反省の社会学」の営みをさらに深化させなければならない。

デュルケーム社会学を事例として現代社会学のディシプリン再生に必要な知見を明らかにする、という本研究の着想は、このように社会学のディシプリンが問題化する現況において、学説研究に何が寄与できるかを検討するなかで生まれた。

- * デュルケームは社会学の方法論を提示し、学派を形成し、その成果を学校教育に導入する努力を重ねることで、制度的な社会学のディシプリンを確立した。
- * アメリカ社会学（パーソンズ、ゴフマン、ベラー）やギデンズ、バウマンらが、デュルケームの批判的読解を通じて新たな学知の創造とディシプリン再構築に取り組んだ。
- * デュルケームの学説はフランスおよび諸外

国において固有の社会・文化的条件のもとで受容され、社会学教育に導入されている。

- * よって、デュルケーム社会学のディシプリンの成立・批判・受容・教育化を事例として研究することで、社会学のディシプリンがどのように構築されてきたかを解明する「自己反省の社会学」の営みをさらに深化させることができる。

そこで、本研究は、ディシプリンの確立を成し遂げたデュルケーム社会学を事例として取りあげ、次の4つの角度から社会学的ディシプリンの成立・変容のプロセスを解明し、現代社会学のディシプリン再生に必要な知見を明らかにすることを目指す。

● 研究推進の4つの柱

*ディシプリンの成立過程

多種多様な“sociologie”論が存在するなか、デュルケーム学派がどのようにして制度的な「社会学」を成立させたのかを考察し、隣接諸学との分節化のプロセスを解明する

… 主に起源解明チーム（A班）が担当

*各国の学説受容と教育化

デュルケームの学説が各国でどのように受容され、教育プログラムに導入されたかを国際的な比較調査によって追究し、学説受容と社会・文化的条件の関係性およびアメリカ社会学の影響を明らかにする

… 主に国際比較チーム（C班）が担当

*ディシプリンの継承・変容

デュルケーム社会学が後代にどのように解釈・批判・継承されたかを、社会学内外の議論を視野に入れて多面的に検討し、ディシプリン変容の過程を明らかにする

… 主に解釈史検討チーム（B班）が担当

*社会学教育法の開発

理論・学説史というディシプリンのコアの部分を適切に継承すべく、我が国における社会学教育（特に学説・理論教育）を調査するとともに、新たな教育法や教材のモデルを開発・提示することによって、ディシプリンの再生に実践的に取り組む

… 主に社会学教育チーム（D班）が担当

各班の研究内容と今年度の研究計画

A 起源解明チーム

●研究分担者（班長以外は 50 音順。以下同）

太田健児（班長）	尚絅学院大学総合人間科学部 教授
小関彩子	和歌山大学教育学部 准教授
菊谷和宏	和歌山大学経済学部 教授
北垣徹	西南学院大学文学部 教授

今年度 A 班は「『社会学的方法の規準』成立とその周辺」を中心テーマに年次計画を立てた。その具体的な内容は、1)『社会学的方法の規準』の再読、2)『社会学的方法の規準』成立の周辺を探るため、(1)人文系学問との交錯模様、(2)当該テーマに関する(直接・間接)研究動向の最前線の掌握、(3)『社会学年報』(和歌山大学全巻所蔵)の研究、(4)第三共和制「後期」の社会学の動向(デュルケーム直後～)の研究、以上の内容からなっている。

具体的な作業として、上記計画 1)に関しては、今夏 A 班の 1 名が渡仏し関連文献を収集し新訳作業に着手する。また上記計画 2)も含めて、①デュ

ルケーム年表の作成(次年度以降継続)、②デュルケーム研究文献最新完全版の作成・公開(Web 上で公開し、当該科研費メンバーが隨時新作文献などを加筆していくシステムにする予定)、③A 班研究結果を『デュルケーム命題集』(仮題)用にカスタマイズする作業、④秋のデュルケーム／デュルケーム学派研究会で進捗状況報告、⑤次年度の日本社会学史学会、日仏社会学会などでの発表、⑥次年度以降隣接領域との研究会開催計画、以上の作業を行っていく。その他、ネット上で持続的な情報交換を行い、8 月以降連携研究者とも連絡し適宜研究に加わっていただく予定である。

B 解釈史検討チーム

●研究分担者

岡崎宏樹（班長）	神戸学院大学現代社会学部 教授
飯田剛史	大谷大学文学部 特任教授
江頭大蔵	広島大学大学院社会科学研究科 教授
中島道男	奈良女子大学研究院人文科学系 教授（研究代表者）
古市太郎	文京学院大学人間学部 助教
三上剛史	追手門学院大学社会学部 教授

B班「解釈史検討チーム」の課題は、欧米の社会学・人類学分野において「デュルケーム社会学はいかに批判・継承されたか」を検討することにあります。社会学内外の議論を視野に入れて多面的に検討し、デュルケーム社会学のディシプリンがどのように変容したかを明らかにしたいと考えています。

デュルケームに対する批判や批判的継承に関しては、班のメンバーが重要な研究を発表しています（三上剛史, 2003,『道徳回帰とモダニティ——デュルケームからハバーマス・ルーマンへ』、中島道男, 2009,『バウマン社会理論の射程——ポストモダニティと倫理』等）。こうした成果をふまえて、私たちはさらにディシプリンの変容という観点からデュルケーム社会学の批判・継承を検討します。そのポイントは5つ。
①機能主義（パーソンズやルーマン）、
②構造主義（レヴィニストロース他）、
③相互作用論・エスノメソドロジー（ゴフマン他）、
④社会学研究会（バタイユ、カイヨワ他）、
⑤社会学内外の自殺研究です。また、

デュルケームとモースの差異にも着目する必要があると考えています。デュルケームからモースへの「継承」のうちにすでに決定的な変化が生じている可能性があるからです。あるいは「継承」とみえるもののうちに失われたものは何かも確認しなければなりません。たとえば、ゴフマンの儀礼論はデュルケームの消極的礼拝を重視した議論であるが、積極的礼拝の問題はどうなったのかといった問題です。ディシプリンの変容という点では、方法論の批判と継承にも着目する必要があります。

8-9月に班会議を開催し、情報交換とともにディシプリンの変容をめぐる共同討議をおこないます。10月10日（土）のデュルケーム／デュルケーム学派研究会（奈良女子大学）では、バウマンによるデュルケーム解釈（中島）、バタイユによるデュルケーム解釈（岡崎）、「自殺論」の解釈史（江頭）に関する研究報告をおこなう予定です。

C 国際比較チーム

●研究分担者

藤吉圭二（班長）	追手門学院大学社会学部 教授
中倉智徳	立命館大学衣笠総合研究機構 研究員
林大造	神戸大学キャリアセンター 学術研究員

国際比較班では、海外現地調査と文献調査を中心、デュルケームおよびデュルケーム学派の理論が、世界各国においてどのように受容され、また学部教育のプログラムにどのように組み込まれているかについて、調査を実施します。国際比較とはいえ限られた予算で世界全体を対象にすることは困難なため、効果的に成果を上げることを目的に、特に非西欧圏に力点を置いて調査を進めます。

まず海外現地調査では、すでに班員がネットワークを構築しているシンガポール、台湾などのアジア圏、およびアルゼンチンを中心とした南米圏での調査を実施すべく準備を進めています。シンガポール、台湾いずれの社会学会においても教授陣の多くはアメリカで学位を取得しており、アメリカ経由のデュルケーム理解が大勢を占めるのか、あるいはデュルケームをはじめとするヨーロッパ社会学の蓄積を直接攝取している部分もあるのか、またデュルケーム社会学のどのような部分が社会学教育において特に大きく紹介されているのかについて、両国の海外研究協力者と連携しつつ調査を進めます。また、アルゼンチン他の南米諸国については、どのような社会学教育が実施されているかということ自体が十分に把握されていないため、今後の研究の展開につなげら

れるよう、学会における研究動向、大学における社会学教育の傾向など基本的な事項についての調査から着手していく予定です。

次に文献調査については、トルコにおけるデュルケーム社会学の受容と教育について調査を進めます。トルコにおいても『宗教生活の原初形態』刊行 100 周年(2012 年)やデュルケーム没後 100 周年 (2017 年)をきっかけにデュルケーム社会学の再評価およびトルコにおける社会学発展の回顧が活発に行なわれており、それらの議論を手がかりにトルコにおけるデュルケーム社会学の受容について調査を実施します。また、アクチュアルなトピックとして、アメリカで始まったオキュパイ運動の理論的支柱と目されているデヴィット・グレーバーの議論を中心に、デュルケーム学派の議論が社会的運動においてどのように参照されているかについて、文献調査に加えウェブ上の議論にも視野を広げ、調査を進めます。

これらの現地調査、文献調査とは別に、班員のネットワークを利用し、アメリカ、カナダの北米大陸などにおけるデュルケーム社会学の教育現場での紹介の実情について、可能な範囲で情報収集に努めます。

D 社会学教育チーム

●研究分担者

白鳥義彦（班長） 神戸大学大学院人文学研究科 教授

小川伸彦 奈良女子大学研究院人文科学系 教授

横山寿世理 聖学院大学人文学部 准教授

山田陽子 広島国際学院大学情報文化学部 准教授 ※平成28年度より研究分担者就任予定

本科研は、「社会学は、社会の変化に応じて学問領域を拡大・細分化することで発展してきたが、理論・方法が多様化し、研究対象が拡散するなかで、ディシプリンの固有性が揺らぎ、発信力や教育力の低下、学徒減少などの危機が生じている」という認識の下、デュルケーム社会学を事例として、社会学のディシプリン再生はいかにして可能かということを、4年間の研究期間を得て探究するわけですが、D班=社会学教育チームは、理論・学説史というディシプリンのコアの部分を適切に継承すべく、社会学の教授法を調査するとともに、新たな教育方法を開発し、ディシプリン再生に実践的に取り組むことを課題とします。そのために、学説研究の成果を社会学教育にどう活かすかを探求することで、現代のディシプリン問題を解決するための知見が見出される、という観点を重視しながら研究を進めます。そして、学説研究の成果を活かした新たな社会学教育法と教材のモデルを開発することを目標とし、そのより具体的な成果として、まずは『デュルケーム命題集』

（仮題）の刊行を目指します。

2015年度には、第一に、10月10日（土）に予定されているデュルケーム／デュルケーム学派研究会において、教育班からは、デュルケームのアルヴァックスに対する影響、デュルケームのパーソンズに対する影響についての報告を行います。また第二に、『デュルケーム命題集』作成に向けての作業を開始します。他の班からのメンバーの参加を得つつ、「編集委員会」を組織し、上半期の間に第一回の会合を持ち、項目数、ページ数、編立てなどの基本的なイメージについて検討する予定です。さらに第三に、国内外の社会学の教科書、公開されているシラバスの中で、社会学の歴史、特にデュルケームおよびデュルケーム学派がどのように扱われているのかを調査します。この調査のために、PDを雇用する予定も立てています。こうした研究活動を通じて、本科研での4年間の研究のための基盤を確かなものとし、これから研究成果につなげていくことが、2015年度の基本的な目標です。

各班の研究計画

- 本科研には、以下の連携研究者も加わります（50音順）

安達智史	近畿大学総合社会学部 講師
池田祥英	東洋英和女学院大学国際社会学部 非常勤講師
梅澤精	新潟産業大学経済学部 教授
荻野昌弘	関西学院大学社会学部 教授
笠木丈	フランス国立社会科学高等研究院 博士課程
川本彩花	京都大学学際融合教育研究推進センター 研究員
金瑛	甲南女子大学 非常勤講師
杉谷武信	日本大学文理学部社会学科 非常勤講師
速水（小島）奈名子	神戸大学大学院人文学研究科 研究員
溝口大助	日本学術振興会ナイロビ・センター センター長
村田賀依子	奈良女子大学大学院人間文化研究科 博士研究員
横井敏秀	大阪大学外国語学部 非常勤講師
吉本惣一	横浜国立大学大学院国際社会科学研究院 研究員

連載 玩味玩読デュルケームのことば 第1回

この連載では、毎号、デュルケームの言葉をいくつかとりあげます。

周知の、そして未知のデュルケームへの扉を読者のみなさんが開くよですがとしていただければ幸いです。

多様な読みへと開くため、解説的なことは〈ミニ〉にしています。

なお訳文は参考に掲げた邦訳書とは異なる場合もあります。

●ことばんごう no.1 ●

第一の、そもそもっとも基本的な規準、それは社会的諸事実を物のように考察することである。

<<La première règle et la plus fondamentale est de considérer les faits sociaux comme des choses.>>

【ミニ解説】

一般的には、実証主義や科学主義のマニフェストとして解釈されるこの命題だが、それだけのものか？ここで注意したいのは、物 chose が観念 idée と対比されていることだ。デュルケームによれば、さまざまな物に囲まれている人間は、それらについての観念をつくることなしには生きていけない。こうした観念は人間に近く、比較的自由になる。ところが物はそうはいかず、よそよそしく、人間に抵抗力をもって立ち向かう。しかし、社会を考えるうえでは、こうした観念を捨て去り、直に物に向き合うように臨めと、デュルケームは檄を飛ばしているのではないか。社会とはいわば、既成の観念を越えた物自体の世界であり、諸力の蠢く物々しい世界だと考えられている（カント、というよりショーペンハウアー的世界観）。物 chose の語は力 force の語とかなり近く（実際テクストのなかで接近している）、場合によっては置き換えて読むことも可能だ。

（北垣 記）

【キーワード】

社会学的方法、社会的事実、物（モノ）

【出典】*Les règles de la méthode sociologique*, 1895 (Presses Universitaires de France 版 p.15)

(邦訳)『社会学的方法の規準』岩波文庫、宮島喬訳、1978年、71頁

●ことばんごう no.2●

じっさい、われわれは、この表現の意味をゆがめることなしに、集合体によって確立されたあらゆる信念や行為様式を制度とよぶことができる。その場合、社会学は、諸制度およびその発生と機能にかんする科学と定義されることになる。

<<On peut en effet, sans dénaturer le sens de cette expression, appeler *institution* toutes les croyances et tous les modes de conduite institués par la collectivité ; la sociologie peut alors être définie : la science des institutions, de leur genèse et de leur fonctionnement.>>

【ミニ解説】

社会を実体化しているという批判に対して、デュルケームは社会的事実を「制度」と読みかえ、さらには社会学の定義へと進む。この観点から、社会的分業、社会主義、家族、教育制度、そして宗教が社会学的に研究された。

(江頭 記)

【キーワード】

制度、発生論的アプローチ、機能

【出典】*Les règles de la méthode sociologique*, Préface de la seconde édition, 1901 (Presses Universitaires de France 版 p.XXII)

(邦訳)『社会学的方法の規準』岩波文庫、宮島喬訳、1978年、43頁（第2版への序文）

●ことばんごう no.3●

このように、社会的な生は、そのあらゆるその部面において、またその歴史のあらゆる時点において、広汎なシンボリズムによつてのみ可能である。

<<Ainsi, la vie sociale, sous tous ses aspects et à tous les moments de son histoire, n'est possible que grâce à un vaste symbolisme.>>

【ミニ解説】

聖なるものをめぐるシンボリズムを社会構成原理の中核にすえようとしたデュルケーム社会理論のマニフェストとも言える一節。邦訳が二種類出揃い、読み比べる楽しみも増えた。

(小川 記)

【キーワード】

シンボリズム、社会的生命（生活）、聖なるもの

【出典】*Les formes élémentaires de la vie religieuse*, 1912 (Presses Universitaires de France 版 p.331)

(邦訳)『宗教生活の原初形態』岩波文庫、古野清人訳、1960年、上巻417頁、『宗教生活の基本形態』ちくま学芸文庫、山崎亮訳、2014年、上巻504頁

トピックス

●出版情報

2015 年に入って海外で刊行されたデュルケームに関する著作を中倉智徳氏に選んでいただきました。

- * Callegaro, Francesco, 2015, *La science politique des modernes: Durkheim, la sociologie et le projet d'autonomie*, Economica.
- * Cassell, Paul, 2015, *Religion, Emergence, and the Origins of Meaning: Beyond Durkheim and Rappaport*, Brill.
- * Charbonnier, Pierre, 2015, *La fin d'un grand partage: Nature et société, de Durkheim à Descola*, CNRS Editions.
- * Dingley, James, 2015, *Durkheim and National Identity in Ireland: Applying the Sociology of Knowledge and Religion*, Palgrave Macmillan.
- * Fournier, Marcel, Charles Kraemer [dir.], 2015, *Durkheim avant Durkheim: Une jeunesse vosgienne*, L'Harmattan.
- * Rosati, Massimo, 2015, *The Making of a Postsecular Society: A Durkheimian Approach to Memory, Pluralism and Religion in Turkey*, Ashgate.

お知らせ

●第31回デュルケーム／デュルケーム学派研究会 秋の例会のお知らせ

日 時： 2015年10月10日（土）午後

場 所： 奈良女子大学

開催内容： 研究会としての定例報告に加え、本科研費研究関連の発表（デュルケーム解釈のレビュー）を予定しています。詳細が決定しましたらデュルケーム／デュルケーム学派研究会HP (<http://homepage3.nifty.com/fjosh/durkheimian/>) に掲載いたします。

※ 備考 参加を希望される非会員の方は、下記までご一報ください。

デュルケーム科研推進事務局 durkheim2017@gmail.com

訃報

二〇一五年六月二日未明、大野道邦先生（神戸大学名誉教授・奈良女子大学元教授・京都橘大学名誉教授）がお亡くなりになりました（享年七三）。

大野先生は、日本のデュルケーム研究の第一人者のおひとりであり、二〇〇〇年には、デュルケーム／デュルケム学派研究会を組織して、研究の活性化に尽力されてこられました。また、ディシプリンとしての社会学を維持することの重要性も強調され、今回の科硏費研究申請を後押ししてくださいました。採択を喜んでくださった矢先の訃報で、研究代表者・分担者・連携研究者一同ただただ茫然としております。

しかしかれわれは前に進まねばなりません。この研究を着実に推進するこそ先生へのご恩返しであるとの思いを共有しつつ、一層レベルの高い成果を目指す所存です。

先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。

（事務局）

成果報告（その全部または一部が本科研費補助金の成果であるもの）

●学会報告

岡崎宏樹「集合的沸騰の分析——溶解・拡大・連鎖」（第55回日本社会学史学会大会一般研究報告、2015.6.27 於京都大学）

編集後記

ニュースレター「社会学のディシプリン再生とデュルケーム」創刊号をお届けします。

このたび採択された科研費研究（右記）の内容と成果を年2回発信する予定です。活動報告や連載企画などを通して、古典の新たな「読み」やディシプリンとデュルケームをめぐる研究成果を掲載して参ります。

科学研究費補助金基盤研究（B）

「社会学のディシプリン再生はいかにして可能か——デュルケーム社会学を事例として」ニュースレター第1号

発行日：2015年7月15日

編集発行：デュルケーム科研推進事務局

〒630-8506 奈良市北魚屋西町 奈良女子大学文学部
中島道男研究室内

E-mail: durkheim2017@gmail.com